

南京豆 NAMENAME

作：河村慎也（南京豆 NAMENAME）

【1：プロローグ】

♪M0 シーナ&ロケッツ『You Really Got Me』

♪強い雨の音

小野、201に隠れて板付き。

⊙201、202 ちょい明転。

マキ、トコ、202 (汚い) に入ってくる。

マキ、適当に床に散らばっている物をどけている。トコはその様子を見ている。

(⊙マキ、丁度良い時に部屋の電気を点ける)

トコ 「・・・えぐ!! (部屋が)」

マキ 「え、何が？」

トコ 「あ、あ、雨が」

マキ 「あーね、凄いやね。雨量がね、凄いやね」

トコ 「この世の終わりみたい!! (部屋が)」

マキ 「ん？」

トコ 「あ！」

マキ 「雨量？」

トコ 「あ、うん、雨量」

マキ 「凄いやね、流されそうだよねこんな家ね」

トコ 「そうかな」

マキ 「ごめんね、人来るの久々だから散らかってるんだよね。これでもマシな方だけ

ど(笑)」

トコ 「(呆気)」

マキ 「やっぱ今日やめとく？」

トコ 「ああいや、大丈夫、覚悟はしてた」

マキ 「覚悟って」

トコ 「いや、受け入れなきゃいけないと思う。マキ君もさ、ずっと入れてくれなかったのを、やっと覚悟して入れてくれた訳だし」

マキ 「根負けしたただけだね」

トコ 「・・・何にせよでしょ」

マキ 「よし、まあ大体」

トコ 「え？」

マキ 「？」

トコ 「大体何？」

マキ 「大体片付いた」

トコ 「マジか」

マキ 「布団の周りは」

トコ 「そうかも」

マキ 「あの、ほら、汁っけは無い！」

トコ 「汁っけ！（裏声）」

マキ 「あ、シャワー浴びる？濡れちゃったし」

トコ 「あ、怖い！水回りは本当に怖い！」

マキ 「（案内しつつ）こっちなんだけど・・・」

トコ 「（ハケつつ）えぐー！」

マキ、トコハケ

☀201 うっすら明かりが入って来る。

♪ (201の方から) スマホのアラームの音

小野、寝ながら止めるやつ。マキ戻って来る。バスタオルを取り出し、

マキ 「これ使って！」

マキ、バスタオルを渡しに行き直ぐ戻って来て、布団に座る。

マキ 「・・・まあこんなもんしょ・・・」

マキ横になる。しばし間。

♪ (201の方から) スマホのアラームの音

小野、なかなか止めない。

マキ 「アメトーークの時間でーす」

アラームなかなか止まらない。

マキ 「うっせー！！」

マキ、立ち上がり壁の方を凝視。小野、爆速で立ち上がり止めて、壁を挟んでマキと対峙する形になる。少しの後トコ戻って来る。

トコ 「どうしたの？」

小野、覗き穴から202を覗き始める。

マキ 「いや、隣、うるせえなって（笑）早くない？」

トコ 「ガス止まってない？」

マキ 「嘘！？マジで！ごめん！（行こうと）」

トコ 「え！大丈夫なの！？隣！」

マキ 「うん！気にしないで！」

マキ、水回りの方にハケていく。取り残されるトコ。

トコ、隣の部屋が気になる。

トコ 「・・・ヤバイ所来ちゃった・・・」

トコ、覗き穴から201を覗こうとする。

マキ戻って来る。

マキ 「ごめん、ガス払うの忘れてたっぼい。」

トコ 「・・・分かる」

マキ 「？」

トコ 「一番忘れちゃうんだよね」

マキ 「ごめん」

トコ 「全然、私が無理言っただけだ」

マキ 「いつかはさ。彼女だし部屋呼びたいなって思ってたんだけど、こんなんだからさ、ボロいし・・・お風呂どうしよ、近くの銭湯行く？また濡れちゃうけど」

トコ 「まだやってる？もう11時だよ？」

マキ 「多分・・・（スマホで確認）・・・あれ？」

マキ 「あれかも、俺前に行ったのコロナ前だし、早まったのかも」

トコ 「良いよ別に私は、体拭ければ。シャンプーある？」

マキ 「無い」

トコ 「ひっ！」

マキ 「湯シャン派なんだよね」

小野、覗きをやめて「V」のリモコンを探し、手に持つ。

トコ 「・・・それは・・・改めた方が良い」

マキ 「そう?」

トコ 「・・・絶対・・・改めた方が良い」

マキ 「・・・何で?」

トコ 「・・・禿げると思う」

小野、TVの電源を点ける。

♪The Knack 『My Sharona』 CI

小野の部屋のTVが点いている。

マキ 「え。禿げないよ」

トコ 「いや。禿げると思う」

マキ 「禿げないって」

トコ 「禿げるタイプだよ」

マキ 「え」

トコ 「あと頭って、けっこう臭いからね」

マキ 「まじ?」

トコ 「まじ」

的なやり取りをしばらく続ける。

⊙暗転

【2:】

時は流れて・・・

♪強い雨の音

⊙201照明ゆっくり明るくなる (転換A)

小野、起床。少しの間ポーっとした後、ベランダの窓を開ける。

トコとマキは各々過ごしている

⊙転換照明 FO

小野 「・・・また雨・・・」

小野 「・・・ここには、碌な人間が居ない」

小野 「二階には老人が二人、二階には生活保護受給者の男と若いカップルが暮らす。」

小野 「201の男は、寝るかお笑い番組を見るか隣の部屋を覗くかを繰り返す。」

小野 「もう何年も隣に住む男は、すれ違ってでも挨拶をしない。CD屋でアルバイトをする傍ら、たまに小さなバーで雇われDJをしながら自由に生きている。品性

には欠け、たまに女を連れ込みしばらく住まわせて、そして別れる・・・最近もまた、馬鹿そうな女が住み着いた・・・覗きがいも増えた」

丸山 202 に入ってくる。トコマキ正座。

小野 「・・・このアパートの人達は、みんな嘘を吐いている」

小野 「長雨と湿気の不快さで、嘘を吐く不快さを忘れてしまってる」

小野 「・・・あ・・・そうだ、不快なんだ。ここは」

小野 「管理会社の女の態度と顔も不快だ」

小野 「不快な顔と言ったら今でも思い出す。区の職員が俺の家に来た時の、あの顔。

あの蔑んだ顔。お前らは俺に、金だけ払えば良いんだ、なのに。蔑んだ顔で見やがって、あげく俺のPS3を取り上げやがった。もしこのまま死んで呪い殺す事が出来たら、あいつは一番最初に殺してやるんだ」

小野 「・・・いや三番目くらいだ・・・」

☆202 明るくなる

正座しているマキ、トコ。玄関ら辺に立っている丸山。

マキトコ 「すみませんでした」

丸山 「うーん・・・」

マキ 「・・・えーっと」

丸山 「・・・」

マキ 「この通りなんですけど」

丸山 「どの通りも無いのよ」

マキ 「はい」

丸山 「ルールはルールだから、ここは単身用なの。分かってる？」

マキ 「はい」

丸山 「普通さ、相談とか、せめて一言言うとかあるよね、人増える前にさ。だって明らか二人住むには不向きだし」

トコ 「☆ひいひい」

マキ 「☆おっしゃる通りでございます」

丸山 「いや相談されても無理としか答えようないか」

マキ 「はい」

トコ 「そっすね(笑)」

マキ 「へらへらすんなよ(足叩く)」

トコ 「やめてよ痺れてんだから」

丸山 「カーーツ」

マキ 「・・・すみません」

丸山 「まあ、まあ、気持ちは分かるよ。若いね、男女の、ね、そうゆうの、ね」

トコ 「分かってくれるって事ですよね？ほら、ほら分かってくれ。人は、話せば、理解し合えるんだよ」

丸山 「家賃増額かな」

トコ 「え!？」

マキ 「マジすか!？そうゆうもんなん？」

トコ 「さあ、追い出されなだけでマシなんじゃね？」

マキ 「いくら増額ですか？」

丸山 「ん〜。倍」

マキ 「倍!？」

丸山 「(トコに) そうゆうもんなの」

トコ 「そうゆうもんなのか」

マキ 「ちょっと取り過ぎじゃないですか？」

丸山 「だから、ルールなんだから。不満があるなら会社に直接言ってよ」

マキ 「いやだから、言ってるじゃないすか」

丸山 「私みたいな末端じゃなくて、どうしようも無いんだから私は」

マキ 「え〜」

丸山 「じゃあ来月から二人分、ちゃんと振り込んでね。あ、管理費は今のままで良いから」

マキ 「はあ」

丸山 「では、御機嫌よう」

丸山ハケ

マキ 「御機嫌ようて」

トコ 「とうとうバレたねー」

マキ 「てか倍って、そんな金ねえよ。引越す？」

トコ 「そんな金もねえっしょ」

マキ 「だよなあ」

トコ 「え? 働く？」

マキ 「その方が良いんじゃない？」

二人、疲れた様子。

マキ 「仕事までもうちよいあるから寝るよ」
トコ 「今日は？バー？」
マキ 「うん、何かビートルズ好きのおじさん達の貸し切りだって」
トコ 「良いじゃん、好きじゃん」
マキ 「そりゃ好きだけどさ、なんかD]って感じしないよね」
トコ 「良いじゃんそうゆうのも。もうマキ君もおじさんなんだから」
マキ 「え〜」
トコ 「あ、ヤバイ、緊張解けたら凄いいお腹空いてきた」
マキ 「トコちゃん全然緊張してなかったじゃん」
トコ 「ラーメン食べたいかも」
マキ 「あ〜冷凍庫に、日清のやつ、あるよ」
トコ 「違う！ラーメン屋に行く！」
マキ 「ん〜ん〜。俺はいいや。今そんな入んない」
トコ 「一人でも行くけど？」
マキ 「行つてらっしゃい」
トコ 「一人でも行くけどさあ」
マキ 「？」
トコ 「一緒にお散歩ぐらいしてくれたって良いじゃん！」
マキ 「分かったよ、途中までね」

二人出て行く。

【3】

☆照明変化

小野 「・・・若いカップルが、大雨だというのに馬鹿な顔してはしやぎながら歩いてる。」
小野 「・・・雨は一切やむ気配は無い・・・」
小野 「・・・晴れでもしたら、俺だって何かする気が起こるだろう。」

小野が一人で喋っている内に、201にいつの間にか水田が居る。

水田 「随分、溜まってらっしゃるみたいですね」
小野 「え」
水田 「はい」
小野 「え」

水田 「はい」

小野、すくんでいる。丸山入って来る。

丸山 「不審者の家に不審者が居る。こんなエキセントリックな体験は無いですね」
小野 「いやいや」

水田 「申し遅れました私、ソフィアの翼」

丸山 「ウイングオブソフィア」

水田 「はい。そしてその第三の父です」

小野 「あ全然分かんない」

水田 「ハハハ！！（大笑い）」

小野 「おう」

丸山 「あ、誰？って顔、してる」

水田 「そりゃねえ、誰？ってなりますよ。こんなんですから！私！誰ー！！」

丸山 「落ち着いて下さい」

水田 「失礼。取り乱しました」

小野 「え？白昼夢？」

丸山 「違います」

小野 「ああ、えっと・・・何でしたっけ」

水田 「ソフィアの翼」

丸山 「父」

小野 「・・・何ですかそれは？」

水田 「あ、えっと、ご存知ない？」

小野 「え？」

水田丸山 「あ〜〜」

丸山 「作戦変更」

水田 「パソコン教室です」

丸山 「です」

小野 「いやいやいや」

水田 「マジマジ」

小野 「え、その、何？パソコン教室の父？が何の用ですか？」

丸山 「私呼びました。私悲しいんです」

小野 「は？」

丸山 「ああ、今月もまた、小野さんから入金が無かったな。って」

小野 「ああ」

丸山 「毎月、ちょっとした希望を胸に銀行で記帳して、やっぱりかとても悲しい思いをしながら電話を掛けるんです。」

小野 「・・・あの」

丸山 「無理がある、と、思います」

小野 「それと」

丸山 「いくら体調が優れないと言ってもね、生活保護だけでやっていこうなんてのは」

小野 「それと新興宗教と何の関係があるんです？」

水田丸山 「パソコン教室です」

小野 「いやあ」

丸山 「手に職付けた方がね、良いんじゃないって。今の時代パソコンくらい使えないと何にもならないから」

水田 「無価値」

丸山 「はい、無価値って事です」

小野 「言い過ぎじゃない？まあ、使えたら良いんだろうなとは思うけど」

水田 「ほら」

小野 「・・・まあそんな、パソコン買う金も通う金も無いんで無理ですけど」

水田 「出番ですね」

丸山 「はい」

水田 「迷える羊の家、というのを私ども運営しております、まあ簡単な話、信者の為の爆安居住施設です」

丸山 「信者じゃない」

水田 「生徒です」

小野 「はあ」

水田 「まあしっかりね色々、働いて貰いますけど」

丸山 「どうでしょう？」

小野 「えっと」

丸山 「衣食住、全部揃ってます。体も動かさず。仲間もいます」

小野 「まあ」

丸山 「何か気付きになればなって。世の中には色々な選択肢がありますから。住むところなんて特に」

小野 「・・・」

水田 「丸山さん、びっくりしちゃってますよ。そんないきなりはねえ、困っちゃいますよねえ。今日はこのくらいにしましょうよ。そうだ、何とお呼びしたら？」

丸山 「親しみを込めてケンちゃん」と

小野 「ケンちゃんは嫌なんで、小野で」

水田 「小野さん、今日はね、一応プレゼント持って来てるんですよ」
小野 「プレゼント？・・・え、パソコンですか？」
水田 「そんな高価な物はあげられませんよ（笑）」
小野 「はあ・・・そうですか」

水田、持ち物の中からリコーダーを取り出し

水田 「邪気を払う、聖なる縦笛です」

小野 「いや普通のリコーダー」

水田 「丸山さんから聞いたんですけどね、小野さんあなた、音楽がお好きとの事で」

小野 「別にそれほど」

水田 「（丸山に）ねえ」

丸山 「や、人違いですね、それ隣の方です」

水田 「あ、そうなんです、まあもう何でもいいや」

小野 「ええ・・・」

水田 「じゃあ逆に聞くけど何が好きなんですか？」

小野 「別に好きな事とか無いですけど・・・強いて言うならお笑いとか、ゲームとか」

水田 「じゃああれですね、ゲームの曲でも弾いてみたら良いじゃない、ねえ」

小野 「いやでもこのアパート、楽器禁止じゃ」

水田 「許可して下さい」

丸山 「許可します」

水田 「何かやる事があるだけで心は楽になりますから」

小野 「はあ・・・」

水田 「（リコーダーを押し付け）じゃあ小野さん、また来ますね」

小野 「また来るんですか」

水田 「はい、是非我がパソコン教室に入信、いや入会して頂きたいので。ではまた」

丸山、水田ハケ。小野、再び寝る。

マキ、少し前に202に帰って来て寝ている。

♪ドビュッシー『亜麻色の髪の乙女』♩

☆照明変化

シズエ 「（ハケから）今日の作ったから、置いとくよ」

マキ 「うんー」

シズエ 「（ハケから）マキくん」

マキ 「んー？」
シズエ 「(ハケから) もう私ここ来ないかもー」
マキ 「・・・何でー？」

シズエ、202 に入ってくる。

シズエ 「距離を置きたいなって」

マキ 「・・・え？何で？」

シズエ 「ペース感の問題？」

マキ 「ペース感??」

シズエ 「マキ君のペース感凄く好き。あまり変わんない感じ。だからずっと変わんないで欲しい」

マキ 「待って待って何の話？」

シズエ 「えっとね、D]的に言ったらBPM」

マキ 「BPM?..」

シズエ 「そう、人生のBPM。私が居る事でマキ君のペース感が崩れるのが凄く嫌だ」

マキ 「いや、そんな事ないと思うよ」

シズエ 「あと私のペース感の方がちょっと、いやかなり早い」

マキ 「・・・そうかも」

シズエ 「あ、あと、私ハウスとかテクノよりビートルズの方が好きだし、何ならクラシックとかの方が好きだから、音楽の趣味合わないんだよね」

マキ 「え?え?」

シズエ 「じゃあね」

マキ 「待って待って、合わせる、合わせるよそっちに」

シズエ 「・・・いやーでも」

マキ 「？」

シズエ 「もう近いペース感の人居るんだよね」

マキ 「・・・えーと、つまりそれは」

シズエ 「うん、ごめんね」

シズエ、出て行く。

マキ 「うそー・・・」

【4::】

⊙日数経過(転換A)

♪雨と潜る音(転換A)

トコとマキは何かじゃれている。

トコ 「(発見) 何これ」

マキ 「これパスポート」

トコ 「持ってたんだ、意外」

マキ 「ノリで取った。返してよそれ大事なんだから」

トコ 「あんま海外とか興味無いと思ってた」

マキ 「今はね。昔はさ、年一くらいで海外旅行行けたらなって思ってたんだけど、結局金無いから全然行けなかった」

トコ 「どこ行きたいの？」

マキ 「イギリス。アビーロードで写真撮りたい」

トコ 「横断歩道？」

マキ 「横断歩道」

トコ 「しまつときなよちゃんと(渡す)」

マキ 「おーわ」

トコ 「ん？」

マキ 「何でも無い」

ここら辺くらいまでに🌀♪転換AFO

トコ 「あ、ちょっとごめん」

マキ 「ん？どした？」

トコ 「発狂しそう」

マキ 「え？」

トコ 「やばいやばいやばいごめんごめんごめんごめんやばいやばい」

マキ 「何で？何で？」

トコ 「部屋汚過ぎ」

マキ 「あれ、今更？」

トコ 「ずっと思ってた、ずっと感じてた、この違和感、え？私順応しちゃってない？」

マキ 「そうゆうもんだと思ってたけど」

トコ 「飲み込まれる！このアパートに！食われる！」

マキ 「そんな突然来るもん？」

トコ 「え？この部屋の物全部捨てて良い？」

マキ 「やだよ！」

トコ 「(咆哮)」
マキ 「落ち着いて！ほら、カービィ(カービィのぬいぐるみを渡す)」
トコ 「ふ〜〜」
マキ 「どう？」
トコ 「落ち着いてきた」
マキ 「よし・・・よし」
トコ 「・・・お母ちゃんがさ、いい加減帰って来たらって」
マキ 「ああ」
トコ 「反応薄」
マキ 「そりゃそうだろうなって」
トコ 「何だよ」
マキ 「だって俺がお母ちゃんだったら心配だもん、このタイプの娘は」
トコ 「は？」
マキ 「何でさ、お母ちゃんなの？」
トコ 「は？」
マキ 「いや呼び方、何かちょっと不思議だなって」
トコ 「良いじゃん別に。可愛いじゃん」
マキ 「あ、可愛いポイントなんだそれ」
トコ 「(立ち上がり) うん！」
マキ 「え？」
トコ 「え？」
マキ 「あれ、帰るの？」
トコ 「ダメかな？」
マキ 「いやダメとかじゃなくて。帰らんぞって感じじゃなかった？」
トコ 「一か月」
マキ 「ん？」
トコ 「私が、マキ君ちに半ば強引にやって来てから一か月が経った」
マキ 「そうだね」
トコ 「一年・・・私は彼女だと言うのに、マキ君は一年もの間、頑なにこの家には入
れてくれなかった」
マキ 「いやほら、呼べるような家じゃないからさ」
トコ 「一か月あったら片せるし、一年あったらもっと片せる」
マキ 「そうだね」
トコ 「おかしいよね？何がどうなってこうなった？あれ？」
マキ 「混乱してる？落ち着いて」

トコ 「私基本的に、マキ君は滅茶苦茶優しいと思ってる。今まで付き合ってきた人中で一番優しい。だけど、部屋を綺麗にしてくれない事は全く説明がつかない。どうゆう事？」

マキ 「深刻に考え過ぎだよ」

トコ 「マキ君は、表面的には滅茶苦茶優しいけど、私の為にしてくれた事がこれまで一切無い？」

マキ 「そんな事無いでしょ」

トコ 「あると思います」

マキ 「・・・ちよつと支度しないと、もう直ぐ仕事だから」

トコ 「出た、出ました。仕事。そんなに夜のクラブが楽しいかい？」

マキ 「いや」

トコ 「エッチなお姉ちゃんがいっぱい居るんだろ！」

マキ 「今日はよく分かんない企業のパーティ的な、バーでやるやつだから」

トコ 「朝まで？」

マキ 「うん、あの、おじさんばかり。奥田民生とかそんな掛けて、誰もDJの事なんて見てないやつ。」

トコ 「キリンジは？」

マキ 「キリンジも掛ける」

トコ 「・・・分かった」

マキ、水回りに移動しようとする。

トコ 「やっぱりさ、この家やめた方が良いと思う」

マキ 「あれ？また始まる？」

トコ 「そもそも終わってないし」

マキ 「でもほら、お金無いし」

トコ 「何でここに執着してんのか分かんない」

マキ 「いや執着って感じじゃないけど」

トコ 「何年住んでんの？」

マキ 「ハタチで出て来てからだから、七年かな」

トコ 「随分気に入ってるんだね」

マキ 「うーん、一回腰据えちゃうとき、俺なかなか動けないタイプだし」

トコ 「随分色んな思い出があるんだね」

マキ 「・・・まあ」

トコ 「この部屋に居ると、ああ私もその思い出の一部に過ぎないんだ、って気になるんだよ」

マキ 「いやトコちゃんはさ、今の人じゃん」
トコ 「今も過去もごちゃ混ぜじゃん、ここは」
マキ 「んー」
トコ 「・・・でしょ」
マキ 「そうなのかな」
トコ 「・・・うん」
マキ 「今も過去もごちゃ混ぜか」
トコ 「・・・私はそう思う」
マキ 「じゃあ引っ越すか」
トコ 「え？」
マキ 「引っ越して、家賃上がっても広くて綺麗なところ、ちゃんと一緒に住んで」
トコ 「う、うん」
マキ 「そんで落ち着いたら籍入れようか」
トコ 「は？」
マキ 「うん、結婚」
トコ 「ちよつと待って下さい」
マキ 「うん。分かった待つ」
トコ 「いや・・・いやごめんあの、うーんとその」
マキ 「ダメか」
トコ 「ダメとかじゃなくて・・・ふざけちゃいけない、こういう事で」
マキ 「ふざけてないよ」
トコ 「ほんとに？D」は？」
マキ 「やめるか。食えないし」
トコ 「夜勤は？」
マキ 「生活リズムずれちゃうから、それもやめるか」
トコ 「その、色んな、費用は？」
マキ 「どっか正規で雇ってくれるところ探して、地道に貯めるよ」
トコ 「おお・・・」
マキ 「だからまあ、今直ぐに話じゃないんだけど」
トコ 「うん・・・」
マキ 「やっぱダメか」
トコ 「いやだからダメとかじゃないんだけど・・・それはさ、つまり」
マキ 「うん」
トコ 「つまりそれは私は、幸せになれるって事？」
マキ 「まあその、いわゆる、的なくらいには」
トコ 「いわゆる的なので良いんだけど、一つ言わせて欲しい」

マキ 「どうぞ」

トコ 「こういった話は、そんな仕事行く前にえいやつみたいなき感じにするべきじゃないと思う」

マキ 「そうかも」

トコ 「あと喋るペース早すぎてちょっと感情が付いてけてない」

マキ 「ごめん」

トコ 「・・・うん・・・」

マキ 「じゃあもう俺支度しないだから、考えといて」

トコ 「分かった」

マキ、ハケ

♪シャワーの音

トコ 「・・・半端なやつめ」

♪雨強まる音

⊙時間経過

【5:】

時間帯は夜中。

201 小野、起床。タバコを吸い始める。

202 トコ、布団に寝ている。

トコ 「寝られる訳ない」

トコ、お腹が空いた様子

トコ 「・・・日清！」

トコ、冷凍庫を物色。

トコ 「・・・ん？(的な)」

トコ、謎の弁当箱を発見。

トコ 「何これ」

トコ、弁当箱を開ける。しかし中身はかなり（数年）経過している様子。

トコ 「……………うえ？…うえ？…うえ〜！！？」

トコ、再度弁当箱を冷凍庫に封印する。

トコ 「……………私は何も知らない……………」

トコ、食べる事は諦め、方針転換しスマホでエクササイズを始める。

小野、覗き穴から202を覗く。

小野 「頭の悪そうな女め」

小野 「何やってんだこんな夜中に」

小野 「ニュースを見ないんだろうな。騒音がきつかけの隣人トラブルなんて腐るほどある、隣が俺じゃなきゃ殺人事件になってる」

小野 「……………やっぱりどことなく似ている。その黒くて長い髪、透き通るような白い肌……………！思春期の俺の心を掻き回した……………ブラウン管の中に閉じ込められた君を舐めるように見た……………！君を！」

トコ、視線を感じ穴の方を見て止まる。

小野 「！（退避）」

トコ、視線を切る。

小野 「（再び覗き）……………ティファアじゃん……………（天に）㊦やりてー！」

トコ、大声にびっくり。後、エクササイズ再開。

小野 「いや……………いや何を言ってるんだ……………生身の人間に対して……………」

小野、再び覗きだす。タバコの煙を穴に吹き付けたりする。

トコ、匂いに気付く。

トコ 「（キョロキョロ）」

小野 「バレるかもしれない」

トコ 「匂うぞ」

小野 「だけどそれが良いんだ。スリリングで、刺激的だ。」

トコ 「(キョロキョロ)」

小野 「これが足りてないんだ俺には、刺激が。こっちだ、どこ見てんだそっちじゃない」

トコ 「ケンスケ？」

小野 「こっちだ！」

トコ 「(覗き穴の方へ)・・・あれ？」

小野 「スリル、刺激。スリル！刺激！」

水田、ここまでにぬるっと(か勢いよく)201にイン。

水田 「ダメですよ小野さん」

小野 「!!?!」

トコ 「気のせいか」

小野 「(唾然)」

水田 「煩惱に溢れてますね」

小野 「おま！何で！」

水田 「今、あなたの脳内に、直接語り掛けています」

小野 「は！？脳内!??」

水田 「信じる者にしか、私は見えないし聞こえないのです」

小野 「いや別に信じてないけど！」

水田 「ほら、疚しい事や煩惱がある時、どうするんですたっけ？」

小野 「え？」

水田 「どうでしょう、心がスーっと楽になりますよ」

小野 「スーっと？」

水田 「スーーーーーっ (水田、消える)」

小野 「おい！」

トコ 「隣の人、一人で喋ってるーーー！」

小野 「クソッ！」

トコ 「怖い~~~~！」

小野、貰ったリコーダーを探し始める。

トコ 「(電話)もしもしー出て~~~~。無理ですかそうですか」

小野、貫ったリコーダーを発見し、JITTERIN'JINN『夏祭り』を吹き始める。

トコ 「・・・何で〜〜!」

♪JITTERIN'JINN『夏祭り』

⊙暗転

【6:】

⊙202 地明かりCI

トコ、タジマ、202 に板付き。

タジマ 「ヤバ」

トコ 「え、普通そうなるよね、普通それだよね」

タジマ 「トコ、適応してんじゃん」

トコ 「それね〜マジ強者」

タジマ 「クズの面倒見んの好きね〜」

トコ 「ほっといたら死んでしまいそうな感じがさ、どうにも刺さるのよ」

タジマ 「元カレ死んでる?」

トコ 「可能性ある」

タジマ 「ワロタ。あ、そうそう土産持って来たの、要る?」

トコ 「何々?」

タジマ 「当ててみ?絶対分かる」

トコ 「いやノーヒント」

タジマ 「すげーよ?ヒント。すげーしてるよ?」

トコ 「・・・え分かんない」

タジマ 「(取り出し) はい」

トコ 「おお〜551-」

タジマ 「トコ、鼻死んでね?もうさっきから凄かったよ?551 臭。鼻突き抜けて後頭部
くらいまで来てたよ?」

トコ 「え〜全然気付かなかった」

タジマ 「この部屋臭いからっしょ?マジ適応してんじゃん。環境に合わせて嗅覚死んで
んじゃん」

トコ 「やば、ショック計り知れねえ。それかほら、寝不足でほら、色々鈍ってる的な
ほら」

タジマ 「ほらほらうるせえな」

トコ 「そんな怒んなってんだよお〜」
タジマ 「(威嚇)」
トコ 「ほらあ〜」
タジマ 「また言った!」
トコ 「てかマジでそれなwwwメドレーwwwマジ睡眠不足www」
タジマ 「(釣られて笑う) え?w何が??w何がメドレー??w」
トコ 「ジッターリンジンwww」
タジマ 「ヒャーッ!!(引き笑い)」
トコ 「夜中のwww3時からwww朝までwww笛でwwwジッターリンジンメドレーwww」
タジマ 「ヒャーッ!!!ww懐かし過ぎwww51くせえ!!!ww」

会話中どこかでマキ202に入っている。
依然馬鹿笑いをしているトコとタジマを見ているマキ。

マキ 「え?何これ?」
タジマ 「ねえ来たんだけど彼氏!」
トコ 「ヤバウケるww」
マキ 「どうしたの?シャブ?」
タジマ 「シャブちゃうわボケえ」
トコ 「お前人の彼氏にボケとか言うなよ!」
マキ 「えっと?お友達?呼ぶなら呼ぶって言ってよ」
トコ 「だってなかなか帰って来ないから」
マキ 「ごめん、結局打ち上げまで付き合っちゃった」
トコ 「それは連絡しろよ!隣がうるさくて超怖かった!」
マキ 「あ、だから」
トコ 「ライン返せ!」
マキ 「ごめん、あんま携帯見てなかった。返すよ次はちゃんと」
タジマ 「絶対しないやつだよねえこれ」
トコ 「ねー」
マキ 「隣大丈夫だった?来たりしなかった?」
トコ 「え」
タジマ 「え」
トコ 「来る事あんの?」
マキ 「たまに、ヤバい人だから」
タジマ 「怖すぎんだろそれは!(壁の方に)」

トコ 「ねえちよっと！威嚇行動やめて！」

マキ 「心やって働けないんだって、管理会社の人が言ってた」

タジマ 「プライバシー終わってんな」

マキ 「それからもう、目に付く人みんな敵みたいになって、んでナマポで引き籠って
る」

トコ 「可哀そうな人じゃん」

マキ 「うん。まあ実際手出てきたりはないから良いけど。せいぜい夜中呻いてた
り、ベランダからウチ覗いてたりするくらい」

タジマ 「もう引っ越せよ！」

マキ 「それでえっと、この、元気なお友達は」

タジマ 「友達ちゃうわボケえ！」

トコ 「ボケやめろ人の彼氏に」

タジマ 「ヒヤッハ！誰？って顔してる！」

マキ 「そりゃね、自分に知らない人が居る状態ですから。誰？ってならない方が無
理あるって言うか」

タジマ 「相棒っすわ」

マキ 「相棒って言葉マジで使うタイプかー」

タジマ 「若い頃！何でも一緒にやったよなあ！」

マキ 「シャブとか？」

タジマ 「やったよお！良い思い出だよなあ！」

トコ 「落ち着いて、シャブはやってない」

タジマ 「やってないかも」

マキ 「そういえば俺、トコちゃんが若い頃何やったのかとか全然知らないわ」

トコ 「言っていないからね、でもウチらずっと一緒よね」

マキ 「へえ、知りたいな昔の話」

タジマ 「そりゃ努力と挑戦の10代20代よ。とにかく面白そうな事全部やったよね」

トコ 「働きたくなかったしね、ユーチューバーとか」

タジマ 「すぎ家の紅しようがに青酸カリ突っ込んでみたとかね」

トコ 「あれは傑作だったねえ」

マキ 「迷惑系かー」

タジマ 「二人でプロを目指すって毎朝早起きしたりね」

トコ 「めっちゃ並んだね、難しい世界だったね、パチプロ」

タジマ 「ニューダイエイとかね」

トコ 「なっ！〜！」

マキ 「何故か埼玉のパチンコ屋だ」

タジマ 「芸人目指すってオーディション受けて滑りまくったりね」

トコ 「時代を先取りし過ぎたリズム系漫才やったね。ペタンコーってね」
マキ 「凄いな、マジで楽しい事全部してんじゃない？」
タジマ 「へへっ。まあね」

マキ、布団に倒れ込む的な

マキ 「ちょっと限界。眠い」

トコ 「ねえー風呂入ってから布団入ってよ」

マキ 「ごめん」

トコ 「あ、てかさ！ヤバイの見付けたんだけど！」

トコ、冷凍庫より弁当箱を取り出す。

トコ 「これいつの!？」

マキ 「三、四年前？」

トコ 「(悲鳴)」

タジマ 「がち？」

マキ 「嘘。先週」

トコ 「じゃあチンして今から食べれる？」

マキ 「無理」

トコ 「じゃあ捨てるよ」

マキ 「あー、しまっというて」

トコ 「マキ君作ったの?これ」

マキ 「(無視) え、てか今日、バイトの面接って言ってなかった？」

トコ 「無理だった、寝てなくて」

マキ 「そっか」

タジマ 「まあそれはしゃーない」

トコ 「そう。しゃーない(弁当箱をタジマに渡す)」

タジマ 「(無声音で悲鳴を上げながら弁当箱を冷凍庫にしまう)」

マキ 「ぶっち?」

トコ 「ぶっち。また探す」

マキ 「そうだね・・・お金必要だからね、色々」

トコ 「うん」

マキ 「二人で頑張らないとって話したもんね・・・話した？」

トコ 「いや」

タジマ 「え? けっこう困ってる感じ? 貸そうか？」

トコ 「マキ君も」
マキ 「？」
トコ 「だからあんま飲み会とか行かないで欲しい、かも」
マキ 「そうだね、分かった」
タジマ 「・・・うん、大丈夫そうか」
トコ 「てかさ！風呂！入ってよ！」
マキ 「眠いんだもん、起こしてよ」
トコ 「何したら起きる？」
マキ 「んんん・・・」
タジマ 「あれ？エロい事始まる？」
マキ 「あれしてよ、時代を先取りし過ぎたりリズム系漫才」
トコ 「え〜だる〜」
マキ 「起きるかもしれない、衝撃で」
トコ 「でも一人足りないからさ」
マキ 「トリオだったの？」
トコ 「うん」
タジマ 「まあでも、イマジナリーでいけっしょ」
トコ 「何でやる気満々ななの？」
マキ 「見たい見たい」
トコ 「しゃーないなあ。簡略版だよ？」
タジマ 「おっしゃ」
トコ 「イギリスで、餅突こうぜー！」

⊙照明変化

|||||漫才タイムここから|||||

- ① 二人、手を重ねる（円陣の形）
- ② 小野、円陣に入ってくる。
- ③ トコ「絶対に、成功させようね〜」
- ④ トコ、一人で頷きその位置に移動し
- ⑤ トコ「絶対に、成功させようね〜」
- ⑥ 小野、頷く
- ⑦ 小野「絶対に、成功させようね〜」
- ⑧ タジマ、戸惑いながら頷く
- ⑨ タジマ「絶対に、成功させようね〜」

- ⑩ トコ、小野、微笑みながら頷く
- ⑪ トコ「お餅を、突く時の掛け声は」
- ⑫ トコ小野「ありまーす」タジマ「ぺったんこーああるとか無いとかなんだ、ぺったんこーって言っちゃったよ」
- ⑬ 餅つきの位置にセッティング：トコと小野両脇で返し手、タジマは中央で突き手
- ⑭ いいよってところで・・・

|| || || || || 漫才タイムここまで || || || || ||

- マキ 「ちょっと待ってちょっと待って」
- タジマ 「？」
- マキ 「何か一人・・・余分じゃない？」
- タジマ 「あゝ」
- トコ 「そうなの、明らかに余分なの」
- マキ 「二人で充分だよね？」
- タジマ 「素人目にも分かるかゝ」
- マキ 「分かるっしょ」
- トコ 「まあそんなこんなでね、方々から要らない奴が居るって言われ続けた結果、そいつは拗ねてどこかへ行ってしまいました」
- マキ 「可哀そうに」
- タジマ 「それだけじゃないけどね、理由」
- トコ 「ねえ！」
- マキ 「(寝る)」
- トコ 「起きないじゃん！・・・もういいや外出よ」
- タジマ 「あ、うん」

トコハケ

- タジマ 「じゃあ、お邪魔しましたー」
- マキ 「・・・すみません、何のおかまいも出来ず」
- タジマ 「いや急にお邪魔しちゃったんで、あ、荷物置いとくんでまた戻って来ますね」
- マキ 「相棒かあ」
- タジマ 「？」
- マキ 「いや。俺の知らないトコちゃん知ってるの、良いなーって」
- タジマ 「わ、キモ」
- マキ 「これからもよろしく頼みます」

タジマ 「はい」

タジマ、ハケ

マキ、そのままウトウトからの寝る。

【7::】

◎照明変化

水田、ここまでにぬるっと201に居る。

小野 「実際のところ」

水田 「はい」

小野 「スーっと、心が楽になった感覚はありました」

水田 「はい」

小野 「今までこう、脳内をぬるい膜が張って目の前が見えにくいというか、何かをやるにも何かを考えるにも膜が気になって手に付かないみたいな」

水田 「はいはい」

小野 「そうゆう様な感覚があったんですけど、あの夜、脳内にあなたが現れて」

水田 「脳内にですか(笑)」

小野 「そうです。言ってみましたしそう」

水田 「覚えてないなあ、脳内だからかなあ(笑)」

小野 「それからこう、膜が取り除かれたというか」

水田 「リコーダーの澄んだ音色が、その邪悪な膜を打ち滅ぼしたんですよ」

小野 「そういう事だった・・・んですね」

水田 「はい」

小野 「ところで、その・・・」

水田 「ソフィアの翼」

小野 「そうです、それって何というか、あの、一体どういう」

水田 「あ、教義的な？」

小野 「教義？」

水田 「あ、教義じゃないか(笑) それじゃまるで宗教ですもんね(笑) パソコン教室ですから。なので目標的な？」

小野 「そうそうそうゆうのって」

水田 「国家転覆です」

小野 「・・・え？」

水田 「・・・あ何かちょっと恥ずかしいかも」

小野 「何で？えてか国家転覆？」

水田 「はい。あの、なりたいな、専制君主」
小野 「え、ヤバ」
水田 「え？」
小野 「こわ」
水田 「怖くない！」
小野 「うお」
水田 「怖くない決して！決して怖くない！！」
小野 「・・・」
水田 「失礼、取り乱しました。」
小野 「ええ」
水田 「まあでも結局ね、目標でしょ？パソコン教室ですから、この辺の人達の「口」技術の向上とかじゃないですか？知らんけど」
小野 「そんな投げやりな・・・」

♪202に着信音

しかし、マキは切ってしまう。

小野 「あと気になってる事があって。何で俺なんかこんな、わざわざ来て、プレゼントまでくれて」
水田 「あゝ」
小野 「何かそんな、打算を疑ってる訳じゃないんですけど、不思議だなって。俺ってもう人生終わってるし」
水田 「ずっと雨降ってるじゃないですか」
小野 「ああ、まあここ最近、雨多いですよ」
水田 「洪水が起きるんですよ」
小野 「洪水？」
水田 「はい。怠惰な生活に慣れ切った人間、主に新宿区の人間に対し、神様が怒って大洪水を起こすんです」
小野 「それで？」
水田 「それで大体死にます」
小野 「そうなんすか？」
水田 「そりゃそうですよ、新宿区に住んでる人間なんて全員心が汚れきってますから。心が隅田川みたい！」
小野 「ちよっとよく分かんないです」

♪202に着信音（何コールかで切る）

しかし、マキは気付かない

水田 「ただね、羊の家は大洪水でも浮かぶように出来てるんです。そこにあなたをお招きしたい」

小野 「・・・何で俺？」

水田 「あなたは澄んだ心をお持ちだ、清流のよう。」

小野 「何だそれ、やめて下さい」

水田 「今のあなたの状態は、理不尽な環境汚染に晒されているだけ。新宿の人間が隅田川ならあなたはこう」

小野 「だからやめろって」

水田 「・・・」

小野 「・・・」

水田 「新宿の人間が隅田川ならあなたは」

小野 「だから」

水田 「あなたは高知県の川です」

小野 「・・・何なんだよもー」

水田 「四万十川です」

小野 「心が綺麗かどうかなんて何の意味も無いじゃないですか。だって別に、何か悪さをしたからこうなってる訳じゃないんですよ」

水田 「はい」

小野 「死なない様に生きてきただけで、特段努力をした訳でもないけど、悪意とか一つも無くて」

水田 「はい」

小野 「人間関係トラブって鬱になったのも、プロゲーマー目指して引き籠ったのも、金が無いからコンビニ弁当ばかり食べて体壊したのも。別に何も悪意なんて無くて、いやむしろその時その時を自分なりに生きたいと思った結果」

水田 「はい」

小野 「結果、人生詰んでました」

水田 「なるほどです・・・甘ったれんなブス」

小野 「え？」

水田 「え？あ間違えた、口を突いて出た」

小野 「だからまあ、心が綺麗かどうかなんて関係無い、この世界はそんな事じゃ存在価値にならないんです」

水田 「説くね。でもね、だから良いんですよあなたは。凄まじい自己嫌悪、いや謙遜。そんなくらいが丁度良い！」

小野 「馬鹿にしています？」

水田 「してない！」

小野 「・・・まあ、良いですけど」

水田 「あなたには使命が必要です」

小野 「使命？」

水田 「純粹で綺麗な心ですが使命が無いから甘ったれブスになるんです」

小野 「何ですか使命って」

水田 「生き延びる事です」

小野 「生き延びる事・・・そもそも存在価値が無い僕が？」

水田 「生き延びて、その四万十川の様な心で、皆を導いて下さい」

小野 「導く？」

水田 「だからウチの教室に入って、しっかり学んで、来るべき時の為に蓄えるんです。知識と力を。あなたの存在価値はそれから生まれるんです」

小野 「・・・パソコンが出来るかどうかは分かりませんが」

水田 「お？」

小野 「(ニヤニヤしている)」

水田 「口角上がってる？」

小野 「この感じ、世界崩壊の後に導く、みたいな。FF6に似てるなあって」

水田 「FF6」

小野 「好きなんですよね、FF。世界観と・・・キャラが、とても魅力的」

水田 「はあ」

小野 「・・・はい。それだけです」

水田 「ちょっとあれですね、やはり小野さんは引き籠り過ぎてる。どうですか？散歩でも。雨でも外に出ると、少し元気が出ますよ」

小野、水田、出て行く。

【8:】

✪照明変化

♪ドビュッシー『亜麻色の髪の乙女』

シズエ (濡れてる)、202 に入ってきて来る。

シズエ 「まだ居んじゃない」

シズエ、シーン1で使ったタオルで色々拭きつつ

シズエ 「風呂借りて良い？」

マキ 「(寝ぼけつつ) ん？良いよ」

シズエ、水回りの方に行く。

♪シャワーの音

しばらく間

シズエ 「おお！ガス！出た！」

マキ 「・・・うん」

しばらく間

マキ 「は？」

マキ 「・・・は？は？？・・・え？？？」

♪シャワー閉める音

シズエ、戻って来る。

シズエ 「久しぶりっ」

マキ 「え？・・・いやいやいやいや」

マキ、シズエに触れる

マキ 「実体だ！」

シズエ 「そうだよ！」

マキ 「はあああ！？」

シズエ 「デカイよ声が！隣来るよ！」

マキ 「ちよつとマジで意味分かんない」

シズエ 「てかまだ居るん？鬱ナマポ覗きおじ！」

マキ 「ねえねえねえ」

シズエ 「わー！この穴まだ開いてんじゃん！」

マキ 「ねえって！」

シズエ 「・・・はい」

マキ 「何で居んの？」

シズエ 「死んでないかなって」

マキ 「は？」

シズエ 「マキが」

マキ 「・・・ここに、何を思って急に現れたのか分からない」
シズエ 「え？」
マキ 「死んでる訳無いし」
シズエ 「人間いつ死ぬか分からないよ」
マキ 「いや、そういう事じゃなくて」
シズエ 「(笑)」
マキ 「何だよ」
シズエ 「目がマジ(笑)」
マキ 「・・・(溜息)」

ちよい間

マキ 「・・・や、てか、何でシャワー」
シズエ 「雨でめっちゃ濡れたから」
マキ 「またか」
シズエ 「普通そんな気軽に人んちのシャワー使わないだろ」
シズエ 「タオル！」
マキ 「え？」
シズエ 「取っというてんのはどうかと思うよー？」
マキ 「そっかあれシズエのか」
シズエ 「うん」
マキ 「いや取っというてんというか、捨ててないだけだから」
シズエ 「何それ。てか全然変わってないじゃん。まだ住んでたんだねこんな家」
マキ 「そうだけど。何の前触れも無く来るもんかね」
シズエ 「随分電話したんだけど」
マキ 「(携帯確認) ほんとだ」
シズエ 「まあ寝てんだろうなどは思ったけどね」
マキ 「・・・ほんといきなり何しに来たの？」
シズエ 「えっと」
マキ 「ちゃんとした理由無いと、有り得ないと思う」
シズエ 「・・・分かるでしょ？」
マキ 「・・・分かんないよ・・・あ分かったわあれか！」

マキ、パスポートケースを探し出す。

シズエ 「そう！預けたまんまにしてさ！すっかり忘れてたの！」

マキ 「はい(ケースから二つ取り出し一つを渡す)」
シズエ 「直ぐ出てきた」
マキ 「この前偶然見付けて、触った感じ二つあったからさ、ゾツとしたよね」
シズエ 「間抜けすぎるよねー」
マキ 「何？海外行くの？」
シズエ 「うん」
マキ 「良いじゃん、どこ？」
シズエ 「ニューカレドニア」
マキ 「・・・どこ？」
シズエ 「知らない？天国に一番近い島」
マキ 「へえ、初めて聞いたな」
シズエ 「ハネムーンの定番だよ」
マキ 「へえ」
シズエ 「そう」
マキ 「・・・え？ハネムーンってさ」
シズエ 「うん」
マキ 「新婚旅行のこと？」
シズエ 「そうだよ」
マキ 「あ、そっか」
シズエ 「うん」
マキ 「・・・え？て事はさ、結婚ってこと？」
シズエ 「そうだよ」
マキ 「そうか、なるほど、うん。え？てことはさ、その、婚約してる人が居るってこと」
シズエ 「と」
シズエ 「確認が各駅停車だな」
マキ 「お、おおう」
シズエ 「ギャハハ！(?)」
マキ 「いや違うよ、シズエが特急に乗っちゃってんだよ」
シズエ 「あー、なるほど、マキから見たらそうかもしれないわ」
マキ 「げー」
シズエ 「あ？」
マキ 「もう何言いたいかわ大体分かるわ」
シズエ 「まあさつきも言ったし」
マキ 「(嫌そうな目で見ると)」
シズエ 「お前変わるねーな！」
マキ 「うるせーよマジ、マジうるせーよ」

シズエ 「ギャハハ！(？)」
マキ 「うぜえうぜえ、何なんほんまに、急に、きつも」
シズエ 「え？怒った？」
マキ 「ずっと怒ってるよ」
シズエ 「出てっから？」
マキ 「うん」
シズエ 「へえ〜」
マキ 「いや、今日、来てから」
シズエ 「そっか、わりいね」
マキ 「俺も結婚すっから」
シズエ 「は？」
マキ 「マジで」
シズエ 「・・・」
マキ 「だから失礼だよその感じ、さっきから。その、俺が前に進んでない前提みたいなさ」
シズエ 「ごめん別に、ガチで怒らせた訳じゃなかった、ってゆうか。散々煽っついてそれは変か。ごめん」
マキ 「いや・・・分かってるそれは、シズエの事だし。この感じ久しぶりだから何か熱くなっちゃったな、ごめん」
シズエ 「いや」
マキ 「パスポート取りに来ただけだもんね」
シズエ 「・・・うん」
マキ 「・・・てか、先ず、おめでとうか」
シズエ 「・・・そっちもね、おめでとう」

しばし間

シズエ 「一緒に住んでんの？」
マキ 「うん」
シズエ 「やば、え？彼女さんは？」
マキ 「今出てる」
シズエ 「帰って来ない？」
マキ 「しばらく大丈夫だと思う」
シズエ 「ああ、そう」
マキ 「・・・イギリスは？」
シズエ 「？」

マキ 「行かないの？」
シズエ 「行かない」
マキ 「そか」
シズエ 「マキは？」
マキ 「行ってない」
シズエ 「行きなよ、新婚旅行で」
マキ 「いや俺は金無いから・・・熱海とか」
シズエ 「熱海？」
マキ 「熱海」
シズエ 「・・・」
マキ 「・・・」
シズエ 「結局そーゆうところは変わってないんだね」
マキ 「しょーがないじゃん」
シズエ 「熱海は近過ぎんだろー」
マキ 「じゃあ沖繩」
シズエ 「あー・・・良いじゃん。成長」
マキ 「うざ」
シズエ 「熱海は私と行ってるしね」
マキ 「金無くて」
シズエ 「せっかく二人でパスポート取ったのにね」
マキ 「気持ちだけ先走ってね、」[TBのパンフ見て気絶しかけたもん]
シズエ 「なついなー」
マキ 「何でニューカ・・・k・・・k・・・」
シズエ 「ニューカレドニア」
マキ 「ニューカレドニアなん？イギリスにすれば良かったじゃん」
シズエ 「旦那バツイチなのよ」
マキ 「ええ」
シズエ 「行ったから嫌なんだって、イギリス」
マキ 「前の奥さんと？」
シズエ 「そう」
マキ 「うわー」
シズエ 「もうそれ言われちゃったらさ、どうしようもないじゃん」
マキ 「確かに」
シズエ 「ねー」
マキ 「・・・ねえ」
シズエ 「ん？」

マキ 「ほんとに結婚すんだね」
シズエ 「は？何で？するけど」
マキ 「・・・なんだろう、幸せ？」
シズエ 「・・・うん、何で？」
マキ 「君はさ、直ぐ嘘つくじゃん」
シズエ 「・・・いやつかないでしょ」
マキ 「よくついてたよ」
シズエ 「考え過ぎ」
マキ 「出てく時にさ」
シズエ 「もう近いペース感の人居るんだよね」
マキ 「そう、それ、それもさ、そうじゃん」
シズエ 「え？」
マキ 「それもさ、冷静に考えてそんな早さでってあり得ないし、俺と一緒に暮らして
た訳だしさ」
シズエ 「あゝ」
マキ 「俺が振り切れる様になって言ってくれた、いわゆる優しい嘘、みたいな、やつじ
ゃん？」
シズエ 「・・・全部マジだけど」

間

♪シヨパン『別れの曲』

マキ 「・・・あ、そうなの」
シズエ 「うん」
マキ 「・・・え、あ、そっか」
シズエ 「うん」
マキ 「・・・わ、あれ？あ、はず」
シズエ 「・・・ごめん」
マキ 「ごめんはやめようか」
シズエ 「・・・ごめん」
マキ 「・・・帰って」
シズエ 「え？」
マキ 「いや・・・」
シズエ 「・・・あの」
マキ 「ちょ、もう、帰って貰っていいかな・・・帰ってよお！！」
シズエ 「大丈夫？」

マキ 「大丈夫だから、うん、俺は大丈夫。むしろ大丈夫？」

シズエ 「何が？」

マキ 「何がだろう？・・・ごめん・・・分かんない」

シズエ 「・・・じゃあ、帰るね」

マキ 「あ、あああのさ」

シズエ 「？」

マキ 「マキ君のペース感が崩れるのが嫌だ、変わんないで欲しいって」

シズエ 「おう」

マキ 「え、俺、変わってないかな？」

シズエ 「私から見たら、そう思う」

マキ 「そっか・・・そうだよね・・・」

シズエ 「・・・うん・・・」

マキ 「・・・あ！でも！」

マキ、急に上裸になる。

シズエ 「??」

マキ 「けっこうさ、あれから、鍛えたんだ」

シズエ 「すごい」

マキ 「(照笑)」

シズエ 「・・・じゃあ、行くね！」

マキ 「おおん・・・連絡しても良い？」

シズエ 「良いよ別に(笑)」

マキ 「おおん」

シズエ 「お幸せに」

シズエ、出て行く。

マキ、上裸のまま一人取り残されている。

少しの後、タジマ帰って来る。

タジマ 「え？」

マキ 「・・・トコちゃんは？」

タジマ 「買い物してから帰るって」

マキ 「・・・おう」

タジマ 「何してんの？」

マキ 「・・・分かんない」

タジマ 「・・・お前プロポーズしたんだってな」

マキ 「・・・おう！」

タジマ 「なんか、頑張れよ」

マキ 「・・・おう！」

♪煽り

FO

マキ、暗くなる中で何回か叫んでも良い。

【6:】

♪ザパア↓ボコボコボコ

♪「V」ニュースの音が最初は大きく、段々恒常音になっていく。

ニュース「東京都心部では〜」

明転

202にトコ、201に小野板付き。トコは何かしている。小野はテレビをボーっと見ている。少ししたらタジマがたこ焼き器（と調理器具）を持って入って来る。

タジマ 「何か全般的にぬめっとしてるんだけど」

トコ 「しょうがない」

タジマ 「これで全部？」

トコ 「うん、あとは食材だけ」

タジマ、そわそわしている。

トコ 「どうした？」

タジマ 「ん!？」

トコ 「ソワソワしてるから」

タジマ 「してねーよ？」

トコ 「してるよ」

「いやあ何かさ、タコパとかめっちゃ久しぶりにやるからさ、初めてデイズニールンドに来た子供くらいワクワクしちゃうってるんだけどさ、同時に何故この家の人間が全く手を動かさないのかという不信感も存在して挙動がおかしくなってる」

トコ 「あ、ごめん何か手伝うよ」

タジマ 「もう終わってるし、お前の彼氏待ちだし」

トコ 「ああ」

タジマ 「あっ！相反する感情に脳が押されて目ん玉飛び出そう」

マキ（スーツに買い物袋） 入って来る。

マキ 「ただいま」

トコ 「おかえり」

タジマ 「お邪魔してますー」

マキ 「買って来たよ」

トコ 「ありがと〜」

マキ 「濡れちゃったからちよつと着替えて来るわ」

マキ、買い物袋を置き水回りの方にハケ。

タジマ、買い物袋を机の方に持って来る。

タジマ 「就活頑張ってたね」

トコ 「ね、偉い」

タジマ 「たこ焼き粉（出す）」

トコ 「たこ焼き粉」

タジマ 「かつお節（出す）」

トコ 「かつお節」

タジマ 「何か塗るやつ（出す）」

トコ 「何か塗るやつ」

タジマ 「つまみ（出す）」

トコ 「つまみ」

タジマ 「酒（出す）」

トコ 「酒」

タジマ 「酒（出す）」

トコ 「酒」

タジマ 「酒（出す）」

トコ 「酒」

タジマ 「・・・タコがねえ」

トコ 「タコがねえ」

タジマ 「そんな事ある？」

トコ 「え〜」

タジマ 「ポンコツ過ぎんだろ！」

小野、迎えに行く。水田入って来る。

水田 「行きましょう」

小野 「はい？」

水田 「使命です」

小野 「・・・」

水田 「生き延びるんです」

小野 「え、今ですか？」

水田 「はい。だってほら、大雨」

小野 「いや・・・」

水田 「最低限の物だけ持って私に着いて来て下さい」

小野、布団に座り込む。

トコ 「ねえ〜〜」

マキ 「(入りつつ) 何？何？」

トコ 「タコ無いんだけど！」

マキ 「え！？うわ！忘れた！」

トコ 「買って来て！！」

マキ 「わーかった！！」

マキハケ

タジマ 「尻に敷いてるねー」

トコ 「敷かれてくれてんのだよ」

タジマ 「良い彼氏じゃん」

トコ 「まあね〜。先に始めちゃうか」

タジマ 「おう」

トコ、タジマ、乾杯

水田 「小野さん」

小野 「使命とか、怖いです」

水田 「どうしたんですか？この前はあるなりにノリ気だったのに」

小野 「僕は別にノリ気になんてなってなかったんです。あなたがそう決めつけていただけで」

水田 「ちょっと」

小野 「結局そう、どこへ行ってもそう、僕の事なんて皆関係無い。居ても居なくても変わらない」

水田 「何を言ってるんです」

タジマ 「あ、この前ね」

トコ 「うん」

タジマ 「彼氏さんに会った時にさ、トコ居なくて」

トコ 「うん」

タジマ 「何があったのか知らんけどさ、何か憑き物落ちた様な顔しててさ」

トコ 「へえ」

タジマ 「あれ、無関心」

トコ 「無関心ってゆうかさ、知ってんだよねその原因。もうずっと元カノ引きずってるの」

タジマ 「そうなの!？」

トコ 「うん、本人隠せてるつもりなんだろうけどもうバレバレ」

タジマ 「え」

トコ 「そんな半端な状態で結婚なんて言うからさ、すげえモヤってたんだよね」

タジマ 「それは確かに嫌っすわあ」

トコ 「まあ何があったのか知らないけど、吹っ切れたんならまあ。その分しっかり尻に敷いてやろうと思って」

タジマ 「良いじゃーん。やっぱりね、男は外で馬車馬の様に働いて稼いでさ、家の中では女の尻に敷かれ続けてさ、その主体性を奪う事でやっと存在意義が出るってもんだよね」

トコ 「良いね、タジマのその厚顔無恥なまでのミサンドリーっぷり、たまんね」

小野 「何を言ってるのか、もう自分でもよく分かんないんですよ、綺麗な心? 悪意が無い? 見て下さいよそのポスターの裏。穴が開いてるんです。偶然見付けたんですがそこで夜な夜な隣のセックスを覗き見えます。そうして僕は自分の存在を確かめるんです。悪意に塗れた存在でしようどう考えても・・・!」

タジマ 「てかトコはさ、もういいの?」

トコ 「ん?」

タジマ 「ケンスケの事、しばらく引きずってなかった?」

トコ 「え、そんな事ないよ」

タジマ 「そう?」

トコ 「もう何年も前の事だし」

タジマ 「うん」

トコ 「何?」

タジマ 「ん？」
トコ 「もしかして会ったの？」
タジマ 「いや会ってないよ」
トコ 「そ」
タジマ 「・・・なんかここ来るとすげー思い出すんだよね」
トコ 「似てるからね、アイツんちに」
タジマ 「住んでそうじゃない？ひょっこり出て来そうだよね（笑）」
トコ 「・・・まあ元気にやっつてれば何でも良いよ！」
タジマ 「・・・けっこう大変らしいね」
トコ 「え？」
タジマ 「え？」
トコ 「・・・大変って何が？」
タジマ 「いやごめん忘れて」
トコ 「は？ちよつと、どゆこと??？」
タジマ 「元カノだし、知ってるのかなって今の状況」
トコ 「いや何も。連絡先とか消しちゃったし。どこで何やっつてるのかも知らない」
タジマ 「そうなんだ」
トコ 「大変って何が？」
タジマ 「・・・私も風の噂で聞いただけだからあんまよく知らないんだけどさ」
小野 「貝になりたあい！！」
水田 「え？貝？」
小野 「貝になれば、誰とも接せずと閉じこもってられるし、醜い心も起きない、醜い心も起きない！自分の醜い心が一番不快！」
水田 「・・・」
小野 「それに洪水で沈んでも大丈夫ですから」
水田 「・・・そういうセリフは、小野さんみたいな何もしていない人が言って良いものじゃありませんよ」
小野 「・・・ううう・・・じゃあ、ティファに・・・会いたい・・・」
タジマ 「何か、キツめの新興宗教にハマっちゃってるとか、ピン芸人目指してみただけ心が壊れちゃったとか、ナマポで金が無さ過ぎて腎臓売ったとか」
トコ 「何それヤバー！」
タジマ 「終いにはガチで死亡説も出る始末で」
トコ 「それはヤバイ！」
タジマ 「ね」
トコ 「ヤバー！（笑）」

二人、大笑い

タジマ 「お前すげー笑うじゃん！」

トコ 「何でだろ！何か笑っちゃう！」

タジマ 「良いのかよ！あんな好きだったのに！」

トコ 「ね！あんなに可愛かったのに！」

タジマ 「可愛いか？可愛くはねーだろ！」

トコ 「可愛かったんだよー！」

二人、笑い続ける。

水田 「小野さん！」

小野 「・・・ゲームが、じゃあゲームがやりたい！・・・ゲームの中に住みたい！」

小野、突っ伏してえぐえぐしている。水田この後諦めて出て行く。
マキ、戻って来る。

タジマ 「あれ？」

マキ 「ちょっと雨すげーからさ、収まってからにしたいなって」

トコ 「敷ききれねーなー！」

マキ 「何が？」

タジマ 「こっちの話」

マキ 「大丈夫？」

トコ 「聞いてた？」

マキ 「ちょい」

トコ 「大丈夫に決まってるだろ！」

マキ 「(決めポーズ)」

トコ 「(決めポーズ)」

タジマ 「(釣られて決めポーズ)」

マキ 「てかもう飲んでんじゃん！ずるい！」

トコ 「はいはいはいはい(酒渡す)タコ無いけど」

マキ 「すまん！」

タジマ 「二人の新たな門出に？」

マキ 「そうゆう会なのコレ？」

トコ 「いーんだよ何でも！」

タジマ 「はーいじゃあ」

マキ 「あ！ちょっと待って！」

マキ、携帯をいじり始める。

トコ 「何ですか急ぎですか?？」

マキ 「いやいや・・・ホイ」

♪JITTERIN'JINN『プレゼント』CI (202 部屋内のスピーカーから掛かっている感じ)

トコ 「おおう！」

マキ 「好きでしょこの曲」

トコ 「知ってたんだ！」

タジマ 「ジッターリンジンなついで。流石DJ」

マキ 「元ですけど」

タジマ 「じゃあ改めて、かんばーーーーい」

トコマキ 「かんばーーーーい」

三人、そのままグイっといき、声が漏れる。

♪ピンポーン

三人、「?」な顔で見合す。マキ、音楽を止めてドアの方へ行く。

丸山入って来る。

【10::】

マキ 「えーっとな・・・」

タジマ 「どちら?」

トコ 「この、管理会社の人」

タジマ 「おあー」

丸山 「皆さん初めまして」

トコマキ 「初めまして?」

丸山 「管理会社のオルターエゴです」

トコ 「別人格来た」

丸山 「あーもうほんとやんなっちゃう」

マキ 「え、何ですか?いきなり来て」

タジマ 「私たち今丁度、ブチアゲタコナシタコヤキパーティーを始めたところなんです

けど」

丸山 「終わり終わり。何だよそれ、とんちか？」

タジマ 「テラ横柄じゃん」

丸山 「突然なんだけど、このアパートはこの後水に沈みます。だから荷物まとめてさっさと出な」

三人 「(何ぞ？何ぞ？的な)」

丸山 「雨凄いでしょ？ずーっと。ここさあ低いんだよ土地。おまけに下が暗渠・・・学の無いお前らに分かる様に言うと見えない川の上に建ってるの」

マキ 「マジで？」

丸山 「まじまじまーじ。パソコンパソコン溢れるよ。でもう何度も浸水してるから」「何度も!？」

丸山 「そう何度も。黙っててごめんさーい。何年か周期でね、大雨が降るとどうしても浸かっちゃうの。でどうとう基礎も腐っちゃった。だから超高確率で崩れて沈みます」

マキ 「いやいやいやいや」

トコ 「急すぎて」

マキ 「どうしてそんな大事な事今まで黙ってたんですか？」

丸山 「だからこうなる前に追い出すつもりだったの、それとなく誘導して能動的にさ、全員。そこでさっさと更地にして売るか貸倉庫にでもしようとしたのに」

タジマ 「ま〜じか」

丸山 「隣なんてすげーいかがわしい新興宗教に協力して貰ったりしてさ。あ〜嘘から出た真になっちゃったよ(笑)」

トコ 「何の話？」

マキ 「さあ」

丸山 「こんな馬鹿な貧乏人しか住まない、住んだそばから馬鹿になる、入居者全員が家賃滞納する、存在自体が事故みたいな物件に、そこでその事故住人に、修繕費も転居費用も払いたく無いんだよ」

タジマ 「はらぐろ〜」

マキ 「まあどのみち、こんなクソみたいなどこもうじき出てくつもりでしたけど」

丸山 「あっそ」

三人 「・・・(溜息とか)」

丸山 「はい、だからトンチパーティーはおしまい！お開き！大事な物だけ持って取り敢えず出てって下さい」

マキ、トコ、タジマ、貴重品とかを手に出ようとする。

小野、リコーダーを吹き始める(ジッターリンジンの何か)

トコ 「あれ？隣」
タジマ 「ヤバおじ？」
マキ 「もういいよ行くよ」

トコ、覗き穴から201を見る。

トコ 「何か寝っ転がって笛吹いてますよ！」
マキ 「何その穴」
丸山 「えー何それ知らないよー」
トコ 「置いてっっちゃうんですか!？」
丸山 「言っても聞かねえよそいつは」
マキ 「(覗き) え何この穴!?!知らなかったんだけど!」
トコ 「・・・ほんとに良いんですか?？」
丸山 「もう良いよ、てかもう死ねば良いよ、死んでも誰も困らないから」

丸山出て行く。

トコ 「・・・」
マキ 「・・・」
タジマ 「穴を気にしてる場合じゃなくない?？」
マキ 「ああ、うん、行こう」

タジマ出て行く。トコなかなか動かない。マキ玄関の方まで行き、トコの異変に気付く。

マキ 「トコ？」
トコ 「・・・」
マキ 「行くよ？」

トコ、頷く。二人出て行く。

【11::】

小野は一人でリコーダーを吹き続けている。

⊙照明変化(時間経過)

トコ、201に入ってきて来る。

小野 「・・・誰？」
トコ 「・・・」
小野 「・・・誰ですか？」
トコ 「・・・私です」
小野 「・・・え？」
トコ 「逃げないんですか？」
小野 「・・・ティファ？」
トコ 「は？」
小野 「ごめんなさい」
トコ 「・・・もう一階の床の上まで水が来てます」
小野 「・・・そうですか」
トコ 「近くに住んでる大工さんが、これ以上水が増えたら絶対に崩れるって言ってました」
小野 「・・・」
トコ 「・・・何で逃げないんですか？」
小野 「・・・」
トコ 「・・・」
小野 「もう生きてたっしょうがないからだよ」
トコ 「・・・また言ってる」
小野 「・・・は？」
トコ 「ケンちゃんだよね？」
小野 「・・・ケン？」
トコ 「その！それその、ジッターリンジンは！よく一緒に聞いたよねだって！私とタジマとケンちゃんと三人とも好きでさ！パチ屋並んでる時に三人で聞いたり、芸人として売れたらこれ出囃子にしようって約束したりさ！」
小野 「・・・(あの)」
トコ 「であとさ、変わるんないよね！いや変わったんだけどさめっちゃ！似合わないって言ったじゃん髭！あーあと茶髪好きだったのにさ！変わらないってのはタバコね！ずっとそれだよ、えっと、何だっけ、好きなんだよその匂い！」
小野 「・・・ウインストン？」
トコ 「え！え！違くない！？何か、あれ！？」
小野 「キヤスター？」
トコ 「そうだよ！キヤスターだよ！それぞれ！匂いで分かるってんだよ！」
小野 「あの、変わったから、名前」
トコ 「知らないし！」
小野 「あ、はい」

トコ 「腎臓売るなよお!! お金無くても!! 馬鹿!!」

小野 「え」

トコ 「体大事にしろよお!! ……ずっと心配してたんだから……」

小野 「えっと、ごめん、ごめんなさい、あれ、何が」

トコ 「何がじゃない! いつも夜に起きて! またこんなボロ家に住んで! ……私が、私が……」

小野 「……私が?」

トコ 「私が……私みたいなの……クズの面倒見るのが好きで、そこに癖があるタイプの人と一緒に居ないとダメじゃん……」

小野 「……やっぱり……ティファですよね?」

トコ 「は!?!」

小野 「ティファで……ゲームから出て、迎えに来てくれたんですよね」

トコ 「何それ!」

小野 「FF7の……クラウドの幼馴染の……」

トコ 「何それ!」

小野 「……ファイナル」

トコ 「何言ってるのか全然分かんない!」

小野 「………お互い様だけど」

トコ 「トコって呼んでよ!」

小野 「トコ?」

トコ 「ケンちゃん!」

小野 「……あの、ケンちゃんって、誰」

トコ 「お前だよ!!」

小野 「ケンちゃん」

トコ 「ケンちゃんなんですよ!」

小野 「……ケンちゃんですけど」

トコ 「ずっと謝りたかった!!」

小野 「!?!」

トコ 「何で私あの時素直になれなかったんだろうって! 本当は追い掛けたいのに意地張って追い掛げずに、大事にしたい人が、大事に出来る時に居てくれる訳じゃないんだとか! いっぱい、いっぱい考えて!」

小野 「は、はい」

トコ 「こうなっちゃうだろうなって……何となく、分かったのにな……」

小野 「こう?」

トコ 「(無言で小野を指さす)」

小野 「……」

トコ 「あんなに可愛かったのに」
小野 「・・・」
トコ 「ごめんね」
小野 「・・・えっと、とりあえず、腎臓は・・・売ってない・・・」
トコ 「そうなの？」
小野 「売ってないです」
トコ 「ずっと体調悪そうだから」
小野 「でも腎臓は・・・悪いから」
トコ 「コンビニ弁当ばかり食べるから」
小野 「はい」

間

トコ 「あのね」
小野 「はい」
トコ 「あなたがくれたプレゼント、あのぬいぐるみ、まだ大事に持ってる」
小野 「・・・」
トコ 「まだ子供だったから、二人ともさ。喧嘩したらどっちもごめんって言えなくて・・・いつかまた会えて、ごめんって言えたら、返そうと思ってた」
小野 「その／＼」
トコ 「行こ？」

トコ、行こうとする。

小野 「ずっと」
トコ 「うん」
小野 「ずっと」
トコ 「ずっと？」
小野 「ずっと気になってたんですけど」
トコ 「何？ケンちゃん」
小野 「そのケンちゃんっていうのは、その」
トコ 「？」
小野 「本当に僕で合ってます？」
トコ 「え？」
小野 「・・・」
トコ 「・・・」

小野 「僕、あの、小野ケンタ、なんですけど」
トコ 「……小野ケンタ？」
小野 「小野」
トコ 「え？」
小野 「ケンタ」
トコ 「ケンスケじゃなくて？」
小野 「はい」
トコ 「……誰？」
小野 「……隣の、小野です……」
トコ 「……あの、あの曲、ジッタリンジンは……？」
小野 「それもなんか、好きなだけっていうか……太鼓の達人で……」
トコ 「……マジで誰……」
小野 「小野です」
トコ 「……小野って……誰だよ……」
小野 「……ごめんなさい……」
トコ 「え、え！？……誰～～～！？」
小野 「ごめんなさい～～～」
トコ 「本当に??」
小野 「本当です」
トコ 「……何型？」
小野 「え？」
トコ 「血液型！何型!？」
小野 「……O型です……」
トコ 「……本当のケンちゃんはAB型だからあー!!」
小野 「……すみません……」
トコ 「そんな都合の良い事はないか～～～!!」
小野 「どうなんでしょううね」
トコ 「ほんと、ほんととお前誰」
小野 「自分でも、もうよく分かんないっす……テイファじゃないし」
トコ 「だからさつきからそれ誰!」
小野 「そんな事……やっぱ、無いっすよね」
トコ 「あー！もおー!」
小野 「……あ……日が」
トコ 「何で～～～!」
小野 「何ででしょうね」

トコ 「日出るなよこんな時に!!・・・雨やむなよ!!・・・もう沈めよ!!いっ
そー!」
小野 「(ちよっとだけ笑う)」
トコ 「沈めよー!」

♪JITTERIN'JINN『黒い服のブルース』C1、大きな音量。

【12:】

◎照明変化

マキ、タジマ、202にイン

水田、丸山、201にイン

小野も加わり、201は肅々と、202はワイワイとそれぞれの部屋を片付けだす。

マキ 「あれ?トコ?」
トコ 「(笑顔を作り)はい!」
マキ 「どこ行ってたの?」
トコ 「何でもない」

シズエ、202にイン

シズエ 「どうも〜」
マキ 「お、おつかれ〜」
トコ 「誰?」
マキ 「お手伝い」
シズエ 「元カノです」
トコ 「は?」
マキ 「あ、これこれ、忘れ物」
シズエ 「何?」
マキ 「(冷凍庫から弁当箱を出す)はい」
トシタ 「(悲鳴)」
シズエ 「要らないよ!捨ててよ!」
トコ 「(マキに)食え!」
マキ 「いやでもさ、弁当箱は勿体ないじゃん」
トコ 「食え!」
シズエ 「また買うから!」
タジマ 「これ元カノの手作りだったんか」

トコ 「食え！」

マキ 「えーでも、やっぱ勿体なくない？」

シズエ 「いや全然？お前にとってでしょ？」

トコ 「食え！」

マキ 「・・・いただきます！！！」

マキ、弁当を爆速でかきこむ。

トシタ 「(大きな悲鳴)」

マキ、えびきながらハケる。

三人、笑いながら追い掛ける。

201、小野だけが残っている。

ちよっと後、トコ、戻って来てカービィのぬいぐるみを渡す。

トコ 「あげます！」

小野 「え？」

トコ 「もう要らないかなって！」

小野 「良いんですか？」

トコ 「頭おかしくなりそうな時、それぎゅっとすると落ち着きますよ！」

小野 「はい」

小野、ハケ

トコ 「さようなら・・・さようなら！」

マキ、戻って来る。

マキ 「大丈夫？」

トコ 「(決めポーズ)」

劇終